魔法先生ネギま！～英雄の息子は錬金術師～

Ｒｏｃｋ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！～英雄の息子は錬金術師～

【Ｎコード】

Ｎ０８３６ＢＡ

【作者名】

Ｒｏｃｋ

【あらすじ】

ネギの弟に転生した男の物語。

鋼錬のエドの仕様で錬金術は使えるが、魔法が使えない体質の持ち主が、ネギま！の、世界でどう生きるのか？

第1話　卒業と修行先（前書き）

はじめまして、そして明けましておめでとう御座います。
初めての投稿のため、不快な感じを受ける方もいるかもしれませんが、読んで、感想くれるとうれしいです。

誤字、脱字の指定は遠慮なく！

第1話　卒業と修行先

メルディアナ魔法学校・講堂

Ｓｉｄｅ　エド

「卒業生代表挨拶。
代表、ネギ・スプリングフィールド。」

「はい！！」

俺はエド・スプリングフィールド。
ネギの双子の弟に転生した人間だ。
転生時の事は覚えてないが、神様は俺の事が嫌いらしい。
父親のナギさえ凌ぐ魔力を持ちながら、一切の魔法が使えない。
しかし、名前の通り鋼錬の『エド』の仕様にオッドアイ、それに錬金術が使えた。
そのため魔力は身体強化か、精霊を使わない物のみに絞られた。
魔法を使えないので、５歳の時から鍛錬をしてきて、今では身体強化なしでも、かなり戦える。
他の魔法使いからは『落ちこぼれの英雄の息子』、『無能な英雄の子』、などと陰口を叩かれたが、戦闘技術は俺の方が上である。
終いにはネギから『立派な魔法使い（マギステル・マギ）に成れないけど、一緒に頑張ろ！！』と、言われた。
原作を知っていたが、何故そんなものになりたい？
俺には理解できん。

「以上で卒業式を終了とする。」

回想に浸って居たら終了していた。
しかし、こんな時でも陰口が止まないのは、なんでかね？
座学は2位、実技は平均以上、魔法具、魔法薬の成績は3年間トップ。
呪術系は解呪なら出来るし、普通に飛び級して当たり前な成績なのに。
あれか？
魔法が使えないイコール飛び級資格なしなのか？
魔法は使えなくても生活には困らんし、必要ないだろ？
コッソリ、アリアドネーに出した『魔法と錬金術の応用性、戦闘時の汎用性』のレポートはあっちじゃ高評価なんだぞ！
それに、『錬金術と魔法の融合術式』も開発した。
送り主欄には『エドワード・エルリック』だ！！
この学校の教師は、俺が錬金術を使えることも、レポートをアリアドネーに送っているのも知らな。
教える理由が無いし何よりこの学校の教師には、恨みは有っても恩はない！！
あっ、ネギがこっち来た。
こっち来るなよ、何時もお前と比べられる俺の身にもなれよ。
あ～あ、また悪態吐いてるよ、あの教師。
確かに魔法が使えないのに、正面から術式ミスや効率のいい術式の組み方論破したけど。
図書室にいくらでも有るじゃん、そんな参考書。
そんな事を考えながら講堂を後にする俺に、ネギがくっついてくる。

メルディアナ魔法学校・廊下

「ネギとエドは、修行場所何処だった？
私、ロンドンで占い師だったけど。」

「何処になるのかしら？」

此奴は幼馴染のアーニャ事、アンナ・ユーリエウナ・ココロウァ。
そして、従姉妹のネカネ・スプリングフィールドだ。

「俺はまだ浮かんでこないな。
ネギは？」

「僕もまだ。」

「お？浮かんできた。」

そこには原作道理道り『日本で先生をやる事。』
何考えてんだか。

その後、アーニャ、ネカネ姉、ネギ、俺で校長に抗議しに行った。
アーニャには『エドは大丈夫かもしれないけど、ネギは絶対に無理よ！！』と言われ、ネカネ姉は貧血で倒れかけた。

しかし校長は、
「卒業証書に書いてあった事じゃ、変更はできん。
それに『立派な魔法使い』に成るための修行じゃ。
安心せい、修行先は儂の知り合いの学校じゃ。」

いや、全然安心できねぇから、それ。

「はい！！」

ネギは元気だねぇ～。

「俺はヤレと言われた事は、ヤリますよ。
既に決まったことなら、ヤリましょう。」

ネギのせいで人生を壊される人間は、最低限でいい。

「エド！
僕、負けないよ！！」

「俺は、立派な魔法使いとやらには興味が無い。
俺は魔法がつかえねぇーんだから。
それに、負けないって魔法使いとしてか？
何度も言うが、俺は魔法が使えねぇーんだ、勝負にすらなって無い。
」

「で、でも、いつか必ず使える様になるよ！
だって、僕たち父さんの、サウザンドマスターの息子だよ！」

またか。
父さん、父さんうるせぇ。

「一度も合った事のない人間を、父親とは言わん。
お前は合ったかもしれんが、俺は合って無い。
それに、魔法なんかなくても生活できるし、仕事も出来る。」

あぁ～イライラする。

「そうかも知れないけど……。
で、でも「悪い、この話は平行線だ。
それに帰って、日本に行く準備もしなきゃならん。
俺はパスポートが発行され次第日本に行く。

くれぐれも、初日から遅刻とかやるなよ？」
……、う、うん……。」
俺はあの時の事件から一人暮らしだった。
それに、この輪には俺はなじめない。

3日後、パスポートが発行され、俺は誰にも何も言わずに日本に向かった。
この先に起こる未来の事を考えながら。

第1話　卒業と修行先（後書き）

如何でしたでしょうか？
パスポートがどれ位で、できるか知らないので、多分早いと3日位でできるかな？
みたいな感じで仕上げました。

次回の投稿は未定ですが、また読んでいただけると嬉しいです。

次回の内容は明日菜、木乃香との接触を予定してます。

第2話　錬金術師と姫達の出会い（前書き）

第2話です。

明日菜、木乃香との接触です。

誤字、脱字ありましたらご指摘してください。

第2話　錬金術師と姫達の出会い

日本・東京某所ビジネスホテル

Ｓｉｄｅ　エド

日本に到着してから三日が立った。
流石に時差ボケを直してから会いに行くのが礼儀だろうと、到着してから数日あけたが、一日、二日で治ると思ったが三日掛った。
そして、着替えて（時期は真冬の為、スーツにあの赤いコート）電車で麻帆良に向かった。

日本・埼玉県麻帆良学園

さて、現時刻は午前１０時、場所は『ネギま！』の舞台、麻帆良に降り立った俺、エドで有るが…。

「……、いくら何でもデカ過ぎるだろ、おい。
世界樹もそうだが、都市としても…。」

現在麻帆良案内所、にて女子中等部に向かう電車と、最寄駅を検索中であるが、デカすぎる為、女子中等部に向かうにしても最寄駅から徒歩１５分以上かかる。
麻帆良に立つ前に連絡を入れたら、
『最寄駅に使いを出すから待っておってくれ。
使いは儂の孫と、その友人じゃフォッフォッフォ。』
と、学園長と思しき人間に言われた。

いや確実に、あのぬらりひょんだ。
自分の孫に使いをさせるなんてあの爺位しかいねぇ。

１０分後
で、最寄駅麻帆良学園中央駅に到着したが……。
人が多いわ～～～！！！
今日、日曜日だろ！？
なんでこんなに人が居るんだよ！？
まぁ、木乃香と明日菜の仕様は、分かってるから探せるか。
と、思っていたら不意に後ろから、
「エド・スプリングフィールド君で、ええかな？
学園長の使いの者です。」
振り返ると、笑顔の大和撫子『近衛木乃香』と、仏頂面の『神楽坂明日菜』が居た。

Ｓｉｄｅ　エド　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　木乃香

うちは近衛木乃香や。
今、うちは親友で寮の同居人、神楽坂とおじいちゃんのお使いに来とる。

「ねぇ、木乃香。
その学園長のお客さん、迎え行くのに私まで付いて行っていいの？」

「ええんよ？

おじいちゃんが良いってゆうたんやし、それに結構美形らしいで？髪は金髪、瞳は明日菜と色が反対のオッドアイ、何時も赤いコートを着取るらしい。」

迎えに行くのにその人の特長を教えてくれゆうたら、そう言われた。

「美形ねぇ～。」

「まぁ、明日菜は高畑先生一筋やから、如何映るかは分からんけどな。」

そんな他愛の無い話をしながら麻帆良中央駅に向かう。

１０分後

駅に着いたが日曜なのに人が多い。

こら特長を聞いとても、探すのに時間かかるわ…。

と、思ったら金髪に赤いコートを着た男の子？がキョロキョロしとった。

瞳は見えんけど、他にそないな格好をした人なんて居らんし、間違いないやろ。

おじいちゃん、お客さんが子供なら子供ってゆうてや。

「明日菜、多分あの子や。」

「何？子供がお客？

なんで子供がこんなところまで？」

「転入生にしてもご両親が居らんけど……。

名前は聞いとるから話しかけてみる？」

「私が、ガキ嫌いなの木乃香も知ってるでしょ？」
「確かにそうやけど話掛けな始まらんから、うちが話しかけるわ。」
「お願い。」
うちは今だにキョロキョロしとる男の子に
「エド・スプリングフィールド君で、ええかな？
学園長の使いの者です。」
と、笑顔で話かけた。

Ｓｉｄｅ　木乃香　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　エド

「エド・スプリングフィールド君で、ええかな？
学園長の使いの者です。」
振り返ると、笑顔の関西呪術協会の姫『近衛木乃香』と、物調面の
黄昏の姫『神楽坂明日菜』が居た。
「はい。
僕がエド・スプリングフィールドですが。
貴女のお名前を聞いても良いですか？」
知ってるけど。
「あぁ、ごめんな。

うちは近衛木乃香。
それと、後ろに居るのが神楽坂明日菜や。」

「近衛さんに、神楽坂さんですね。
改めて、エド・スプリングフィールドです。
此の度はこちら、麻帆良にて『教師をせよ』と、学校から支持を受け、参りました。
以後、何らかの形でお世話になると思いますので、よろしくお願いいたします。」

子供らしくない？
行き成り『失恋のそうが出てますよ？』なんて笑顔で言われるより、ショックは少ない……ハズ。

「……。」

「……。」

十分ショックはデカかった。
畜生！！

「エド君今、いくつなん？」

木乃香さん再起動。
明日菜さんフリーズ継続中。

「来年で１０歳です。
小さいとき色々有りまして、公私のけじめが極端になってしまいまして……。
もし、嫌でしたら口調崩しますが？」

苦笑いしながら木乃香さんに問いかける。
アリアドネーにレポート送る時とかに丁寧口調とか使ってたら、スイッチの切り替えが簡単に出来るようになった。

「そうしなさい。
アンタみたいなガキにそんな口調されると、こっちの調子が狂うわ。
」

明日菜さん再起動。
まぁ見ず知らずの他人とは言え、こんなガキがこんな口調だと調子狂う。

「では、失礼して。
俺が、エドです。
よろしくお願いします。」

多少口調を崩す。

「まだ堅苦しいな。
でも、時間が時間やし、そろそろ学園長の所に案内するで。
後、うちの事木乃香でええんよ？」

「私も明日菜で良いわ。
代わりにエドって呼ぶけど。」

やっぱり来たか。
来るとは思ったが。

「構わないが、俺も完全に口調崩すぞ？

それでも良いなら、良いが。」

口調を完全に戻し二人に話しかける。

「良いわよ。
それに、あんたなんか分からないけど精神年齢が年上って感じするし。」

「あっ、それうちも思った。」

何故解る！？
確かに前世は２５歳だったし、会社勤めもしてたし。
仕事内容は外回りの他会社相手だったから、自然にこういう公私のケジメが付けられるようになったけどさ！
いくら何でも早くない！！
その後、他愛のない話をしながら麻帆良学園及び関東魔法協会本部のタヌキこと、近衛近右衛門のもとに向かった。
（正論叩きつけてフルボッコにしてやんよ！！！）

Ｓｉｄｅ　エド　ｏｕｔ

その時、建物の上から二つの視線がエドに向いていたのを彼は知らない。

第3話　学園長との対決（前書き）

予想以上に書けた。

第1話、第2話共に武藤様よりありました誤字、脱字の修正を行いました。

誤字、脱字のご指摘お願いしま！！

第3話　学園長との対決

麻帆良学園女子中等部・学園長室

Ｓｉｄｅ　エド

明日菜と木乃香に連れられて女子中等部に有る、学園長室に向かっているわけだが。
先ほどから視線が痛いし、疑問が絶えない。
視線が痛いのは俺が子供で、二人の間に居る為兄弟に見えなくはないので、温かい視線はいい、兄弟じゃないからよくもないが。
しかし、後ろで殺気立ってる視線が、ひじょ～に痛い。
どうせ護衛と言いつつ、自分の感情を優先する愚か者だろうが。
そして疑問。
何故この二人は俺の過去を知りたがる！！
何故学園長室が麻帆良学園最深部の女子中等部にある！！
そして魔法教師及び生徒！！
尾行するならもっと気配を隠せ！！
ばれてるぞ！！
そんな事に悩んでいると学園長室についた。
さて、妖怪退治だ！！
（注意）ただの八つ当たりです。

「此処や。」

コンコン

「おじいちゃん。
連れてきたえ～。」

『おぉ、木乃香か？
入っとくれ。』

「ほないくえ～？
チョット初めて見る人には、辛いかもしれへんけど。」

覚悟の上じゃ！！
木乃香の後に続いて部屋に入る。
そこには、高畑さんと予想よりもインパクトの大きい後頭部を持った妖怪、ぬらりひょんが居た。

Ｓｉｄｅ　エド　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　高畑

今日、エド君が麻帆良に来る。
僕は学園長とメルディアナから、送られてきた彼の資料を読んでいるが、
「魔法が精霊を使う物のみ全く使えんとは……。
しかし、かなり優秀じゃの。
夜の警備も引き受けてくれるかの？」

僕の前では学園長がそんなことを言っているが、
「僕は、彼が警備の仕事を引き受ける事は、まずないと思います。」

彼は必要最低限の事、あるいは自分が興味の有ることのみをやるタイプの人間だ。
他人からの指図は受けないし、それにそんなこと言ったら、逆に叩かれる。

「じゃが、彼の協力が有れば確実に守れるぞい？
大体の要求は呑むつもりじゃ。」

そんな悠長な事を言ってられるのも今のうちだけだ。
僕も彼の強さを知っている。
彼はこの学園……、嫌あるいは僕と学園長が一緒になって戦っても
勝てない。

コンコン
うん？来たかな？

『おじいちゃん。
連れてきたえ～。』

「おぉ、木乃香か？
入っとくれ。」

「取りあえず、この話は後じゃな。」

扉が開き木乃香君、エド君、明日菜君の順で入って来た。
さてどうなるなかな？

Ｓｉｄｅ　高畑　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　エド

「よう来たのぉ～。
儂がここ、麻帆良学園学園長の近衛近右衛門じゃ。」

（明日菜、木乃香、ここは妖怪が学園長なのか？
お世辞にも人間とは言えない。）
小声で二人に話しかける。

木乃香が、
（一応うちのおじいちゃんやから、人間のハズや。）

明日菜は、
（本人、その事を気にしてるから、言わないで置いた方がいいわ。
私も最初引いちゃったし。）

どうやら同意見を持っているらしい。

「いや、儂人間じゃよ？
のぉ、タカミチ君？」

「ははははは。」

お～い高畑さんよ～。
笑いが乾いてるぞ～。

「まぁ、良いでしょう。
初めまして、エド・スプリングフィールドです。
よろしくお願いいたします。」

まずは、挨拶。

「いやいや、良くないからね？
儂は歴とし人間じゃから。」

「冗談ですよ？」
「本当かの？
まぁ、話が進まんから後にするとして。」
（（（話が終わったら、またやるんだ））））
俺、明日菜、木乃香の思った事がシンクロした。
「エド君には、教育実習生として、２－Ａの副担任と、数学教師をやって貰いたいのじゃが。
良いかの？」
「僕は構いませんが、１０歳の僕が教えて大丈夫なんですか？
生徒さん達の事が最優先だという事が、分かっているならいいですが。」
原作だとこの爺、ネギの為に３０人近い一般人を巻き込みやがったからなぁ。
信用できねぇ。
「それと、エド君の部屋なんじゃが明日菜君、こ「二人の部屋に泊まれ、なんていいませんよね？」……、い、いやそのな、君の部屋を用意しようにも時間が無かったんじゃ。
じゃから部屋が見つかるまで二人の部屋に泊まってくれんかの？」
「3日前に僕はこちらに来る、と伝えたはずです。
なぜ3日も有ったのに教員寮はおろか、アパートさえ探せなかったのですか？
そこに居る高畑さんにも手伝ってもらえば一つぐらい確保はできた

のでは？
教師をやるということは、生徒に見せられない書類の処理や整理をしなければならない。
その書類を二人に見せてもいいなら、許可は僕ではなく、二人にとってください。
二人が良いと言うなら、僕は従います。」

ネギみたいに失礼はしてないし、何か友好的だったからもしかしたら。
それにこの爺、体のいい護衛役も押し付けるだろうから絶対に二人の部屋に放り込もうとする。

「書類の件は教育実習生である間は、ほかの教師が手伝ってくれる手はずになっておる。
心配はするな。
それに、二人の部屋に住むのは今年度限りじゃ。」

そう来るのか。
なら釘を刺しておくか。

「僕が出て行ったからと言って、ネギを二人の部屋に放り込まないで下さいよ？」

「さすがに2度も同じミスはせん。
それで、二人は今年度だけじゃがエド君をたのめるかの？」

「うちはええよ。
エド君カッコええし、ちょっと話したけど優しそうやったし。」

木乃香の賛成。
「私もエドだったらいいわ。
最低限の礼儀は、守るでしょ？」
明日菜も賛成。
腹、くくるか。
「親しい仲にも礼儀あり。
お互いのプライベートには不干渉で行きましょう。」
「決まりじゃな。
明日菜君、木乃香少しエド君と話があるから廊下で待っててもらえるか？」
「分かったえ。」
「分かりました。」
明日菜と木乃香が退室したのと同時に防音結界が張られた。
「さて、エド君。
ようこそ、関東魔法協会へ。」
やっぱりか。
どうせ夜の警備の事だろ？
「君ならしっとるかもしれんが、ここは強力な霊地じゃ。
この地を狙って多くの者達が、夜襲撃してくる。

そこで、君にはその警備に参加してほしいんじゃ。」

ふっふっふっふ。
予想道理。
正論、で論破しちゃる！！

「僕の修行課題は『日本で教師をすること。』であり、魔法教師としてではありません。
貴方の言い方だと魔法関係者の教師とは、夜の警備も仕事に含まれるのですか？」

如何返す？

「皆、マギステル・マギのなるべくこの仕事を受けておる。
未熟者なら参加はさせんが、君は優秀な戦闘能力を持っておる。
じゃから「なんか、勘違いしてねぇか？」ふぉ！？」

俺が行き成り口調を変えた事に戸惑ってるな？
くっくっく。
此処から俺のターン！！

「俺は、マギステル・マギなんかに興味はねぇ。
ただ卒業の課題が、『日本で教師をすること。』だっただけだ。
ここがどんな場所で、どんな事情が有ろうが、俺の課題には関係がない。
違うか？」

「しかし……、此処で所業するのに当たって、生徒たちが心配ではないのか？
生徒達のために「ふざけんな。」む。」

イライラする。
ほんと～～に、イライラする
爆発しちゃうよ？

「関係が無い生徒を人質か？
お前らＭＭの魔法使いはいつもそうだ、自分達の意見、意志、価値こそが絶対だと思ってやがる。
俺が副担やる２－Ａ。
これだってネギの為の物だろ？
英雄の息子の契約者にふさわしい人間を集めた特殊クラス。
神楽坂明日菜。
彼女は魔法世界でも、ある一族しか持っていない魔法無効可能力（マジック・キャンセル）。
近衛木乃香。
極東一の魔力保有者にして、関西呪術協会長、サムライマスター、青山詠春の娘で、アンタの孫。
この二人だけでも十分お釣りがくる。
更に言ってやろうか？」

「……。」

おや？
黙るの？
黙っちゃうの？
黙っちゃっていいの？
俺、容赦しないよ？

「俺に警備させたきゃこの二人に、俺の存在とここがどういう土地で、二人がどういう立場かを分からせることだ。
どうせネギでバラスなら、俺でも一緒だろ？

そして、『闇の福音（ダーク・エヴァンジェリン）』の、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルの事を俺に一任し、口出ししない事。
更に、俺が魔法関係者だと分かった人間、あるいは不測の事態でばれた人間に対し、お前たちの口出し、干渉しない、以上が条件だ。
これを呑むなら警備どころか、教師としての給料もいらん。
（金ならいくらでも作れる。）
二人については簡単だ。
彼女たちの力は狙われやすい。
故に話す。
エヴァンジェリンについては、親父の引き継ぎと、お前たちの尻拭い。
学園都市の一般人に犠牲者を出すか。
魔法関係者三人を俺に差出し、俺がばらした魔法関係者に対する干渉をせず一般人を守るか。
二つに一つだ。」

交渉とは、まず自分のマイナスを考え、利益を考え乗るかそるか、ではない。
自分の弱みを見せず、相手の弱みを握り自分に優位な状況を作る事。
金で解決するのがこの場の鉄則だが。
俺は金は要らんから条件を呑めと言った。
さぁどうする近衛近右衛門。
俺にマイナスは無い。
明日菜の能力、木乃香の治癒能力、さらに半妖の桜咲刹那もついてくる。
龍宮真名は金塊積めばこっちに来るだろうし。
エヴァに師事して貰えば体術、対魔法戦闘の強化、チャチャゼロが復活すれば近接戦も鍛えられる。
少なからずエヴァに血を吸われて、アレが作れなくなるが大した事は無い。

どうする？

「言い過ぎじゃないかい？」

高畑か？

っち！

外野が。

黙ってればいいものを。

「エド君。

君の言い分は正しい。

しかし、明日菜君も木乃香君も守るべき生徒だ。

そんな君も、学園長となんら変わらない。」

正論ならべりゃ勝てるとでも？

甘いわぁ！！

「確かにアンタの言ったとおり。

俺もこの爺と変わらない。

だが、教師としてきた俺に、他の仕事をさせ本職がおろそかになる様な事が有ってはならない。

現に居るんじゃないか？

夜の警備をさせて、学業がおろそかに成っている生徒が。」

「……。」

はい、しゅ～～りょ～～！！

弱い！弱い！！弱すぎる！！

もうちょっと粘ると思ったが。

こんなもんか？

「分かった、お主の条件すべて呑もう。」

「がっ、学園長！！」

「では、失礼します。
二人が待っているので。」

安心してるな？
だが、甘い！！
徹底的に潰しちゃる！！

「それから学園長。
2、3言い残したことが。」

「な、何じゃ？」

「木乃香にお見合いを、強要させた事。
詠春さんに報告し、魔法に触れる事に同意を得た上で、教えますから。」

あっ、焦ってる。

「それに、あんたは俺に『あわよくば木乃香の護衛に』なんて考えてたでしょうが、回りくどくではなく、ストレートに言ってくれれば引き受けましたよ？」

表情が曇った。

「最後に、俺はあんた達を一切信用していない。」

そう言い残し部屋を去る。
精々足掻くがいい。
足掻いたところで何もできんし、何もさせんわ！！
はあっはっはっはっはっ！！
部屋の外の壁に寄り掛かり、雑談していた二人に声をかけ二人の部屋へ向かった。
明日、エヴァの家での対処法を考えながら。

Ｓｉｄｅ　エド　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　学園長

彼はどれほどの力が、いや彼はいったい何者なんじゃ？

「タカミチ君。
彼さっきの言い方、交渉術、君から見てどう見えたかの？」

「はっきり言って恐ろしいです。
それに、戦闘能力では僕も勝てるかどうか……。
何かいか模擬戦をやったことが有りますが、何度か負けました。」

「そんなに強いのか！？」

これは予想外じゃ！

「はい。
僕は一度だけ全力を出しましたが、その時は相打ちでした。
それでも彼は全力を出していないと思います。」

恐ろしいの。
彼が何を考えて居るか、彼の全力すら分からん。
彼を警戒するしか手はないの。

Ｓｉｄｅ　学園長　ｏｕｔ

第3話　学園長との対決（後書き）

アンケートですが。
エヴァとの対決を5話にしたいと思いまして、主人公無双か、エヴァちゃん無双のどっちがいいでしょう？

6日の夜ぐらいに更新したいと考えていますので、ご意見お願いします。

アンケートがないとエヴァが無双します。

第４話　古菲との手合せ、明日からの準備（前書き）

遅くなりました。
本当は、昨日あげる予定でしたが、原作を読み返すとネギの卒業が２００２、０７と１巻２ページ目の一コマ目、右端に出てました。
そこで１話から少しずつ手直しを開始するので、次回の更新は何時になるやら……
第３話少し変えて付け足しました。
誤字、脱字ご指摘してくださった方々のは感謝感謝です。
この話は試験的に書き方を変えました。
この方が読みやすい、前のほうが読みやすいかの、意見もできればお願いします。

誤字、脱字ご指摘お願いします。

第４話　古菲との手合せ、明日からの準備

麻帆良学園内

Ｓｉｄｅ　エド

俺は今ピンチである。
「さぁ、勝負アル！！」
このセリフでわかるだろ？
俺は中国拳法家の古菲に捕まっている。
どうしてこうなった！！

回想
「そういえばアンタ、私達の部屋に泊まるって話が出たときにあんまり反論しなかったわよね？」
明日菜が疑問に思ったのか問いかけてくる。
「あの状況じゃいくら反論しても俺に勝ち目はない。」
「何でなん？」
「簡単だ。学園長は『部屋が見つからないから二人の部屋に泊まってくれ』、こういったよな？」
二人は首を縦に振る。
「このことから、俺に残された逃げ道は二つ。
一つ目、学園長の言った通りに二人の部屋に泊まる。
二つ目、学園長の言葉を振り解き、部屋が見つかるまでホテル暮らし。
此の二つだ。
そして、恐らくお前ら二人は俺がホテル暮らしをする事に反対だろ？」
「「当たり前よ！」や」

「そうなると言い出した学園長、高畑さんも賛成、お前らも賛成だ。
四対一じゃあいくら俺でも口では勝てない。
だから、書類の話を持ち出したんだが、そこには手を打っていた。
そうなると、俺の勝ち目が一気に無くなる。」
「「ほぉ～。」」
簡単では有るが、状況を説明すると二人は納得した。
魔法の話を持ち出せば勝てただろうが、あの爺は最初から巻き込むつもりだったからな。
俺が今までしてきたことを言ってやれば何とかなったかもしれんが、それだと二人に話さなきゃならなくなる。
明日菜は兎も角、木乃香は親の方針だ。
勝手には教える事は出来ない。
最悪、事後報告でも良いが、一言いれた上で話した方が後腐れが少ないだろ。
「そういや何処向かってんだ？
女子寮は確か電車に乗らないといけないんじゃ？」
今、駅の近くではあるが二人は駅には向かっていない。
「そろそろお昼でしょ？
だからお昼済ませてから帰るのよ。」
時刻は１１時半過ぎ。
今日は此れと言って何かした訳ではないので、そこまで腹は減ってない。
「俺は構わないが、昼飯代位は出させろ。
流石にこれから世話になるんだ、此れ位はさせてくれ。」
金には困って無いし、最悪ダイヤでも錬成して売ればいい。
「これから行くとこはお金の心配せへんでいいんよ？
超包子やから。」
「何だ、そこ？」
確か未来人の超鈴音が経営してて、四葉五月、古菲、後学祭中に葉加瀬聡美、絡繰茶々丸が働いてたな？

学祭中は移動屋台だったが、それ以外の時はどうなってるんだ？
「うちの学校、初等部から大学までの共通の部活とか同好会が有るから。
そして、そのうちの一つの『お料理研究会』が経営してるお店が、超包子。」
「本格的な中華料理のお店やのに、学生にはうれしい低位価格なんや。
ほんで、その第一号店がここや！」
麻帆良中央駅から徒歩5分程度かそこらに有る、貸店舗ビルの一階に超包子が有った。
昼少し前と言う事も有ってかあまり人が居ない。
「ほな、入ろか？」
入ろうかと思った時、
「んだと、てめぇ！殺されてぇか！！」
はい、お約束、お約束。
近くでチンピラどもの言い争い。止めてくるか。
「ちょっと止めてくる。二人は席の確保よろしく。」
「大丈夫なの？あの人達、多分高等部の人たちよ。」
心配してくれるのは有り難いが、大丈夫だ。
「大丈夫、大丈夫。」
ヒラヒラ手を振りながらチンピラどもに近づく。
一触即発、こりゃまずいな。
「お兄さん達、往来の真ん中で、しかもお昼近くなんですよ？殴り合いなら他所でやってくれません？」
「んだと、このガキ！！」
チンピラの一人が殴りかかって来たが、甘い！
チンピラの放った右ストレートを、左手で右に流す。
チンピラの踏込に合わせながら、顔面に左ヒジを叩き込む。
避ける事は叶わずに直撃し、踏込のスピード、自分の体重、さらに俺が軽く踏みこんだ左ヒジを食らいダウン。

周りのチンピラどころか通りかかった人達の注目も浴びる。
（やり過ぎたか？）
等と考えて居ると。
「勝負アル！！」
この一言。
回想終了。

「そして今に至る、と。」
「一人でぶつぶつ言ってないで、勝負アル！」
来た初日から古菲と縁カウント。
体術じゃ絶対に勝てない。
かといって魔力ブースとも使えない。
「軽く手合せ程度なら……。」
本当に軽くなら大丈夫だろ。
「私としては全力で勝負したいアル！」
これだから勝負馬鹿（バトルマニア）は！！
「えっと、さすがにお昼前ですし、全力はご遠慮したいかな、と……。」
「しょうがないアルね。いつか全力での手合せを約束に、今日は軽くアル！！」
結局やるんかい！！
「行くアルよ！」
古菲の右の正拳を先ほどと同じ様に、左で右に流すが、
「甘いアル！それはさっき見たアル！」
流す力を逆に利用し、回転しながら左の裏拳。
俺は古菲の軸足にしていた右の膝に、膝カックンを入れる。
古菲はバランスを崩すが、右足に力を入れ、軸足でジャンプし、左足の回し蹴り。
屈んでよけながら、左足が頭上を抜けるのと同時に顎のアッパーを入れる。

ニッ！
古菲が笑った理由と、目的が分かったが避けきれず、軸足に使った右の膝が側頭部に突き刺さる。
意識は失わなかったが、軽い脳震盪を起こしたのかバランスを崩し尻もちをつく。
「勝負ありネ！！」
負けたが、魔力のブースとなしじゃこんなもんか？
「しかし強いアルね。私は古菲、中国武術研究会会長ネ。名前はなんと言うアルか？」
今更自己紹介かよ。
「俺はエド、エド・スプリングフィールド。中途半端な時期だが、教育実習生だ。
中国武術研究会の会長と手合せできて、うれしいよ。」
右手を差し出すと確りと、握手してくれた。
まだまだ、体術は未熟だな。

Ｓｉｄｅ　エド　ｏｕｔ

学園長室

Ｓｉｄｅ　学園長

「今の動きを見て、皆はどう思ったかの？」
現在この部屋には魔法先生のほとんどが集まっておる。
遠見の魔法で彼の動きを見ておったが、かなりの手練れじゃな。
「かなり強いと思います。それに魔力による強化を一切していなかった。」
ガンドルフィーニ君の言うとおり、魔力強化をしていた動きには見えない。

「味方に成れば心強い、しかし敵に回れば厄介でしょう。」
「この動き、本当にメルディアナ魔法学校では、落ちこぼれだったんですか？」
ガヤガヤ。
それぞれ思ったことを言い始めた。
確かにメルディアナでは魔法薬、魔法具の製作はトップ。
実技ではかなりの成績を収めておる。
魔法しか見ていなかった、というのが丸わかりじゃ。
「学園長。」
「何じゃ？ガンドルフィーニ君」
「彼は、私達に協力するのでしょうか？」
ここで誤魔化してもしょうがないの。
「彼は、儂等のことを信用しておらん。さらに『闇の福音（ダーク・エヴァンジェリン）』を一任し、干渉するなと言ってきた。」
魔法先生の間に衝撃が走った。
「学園長！！今すぐに彼の卒業取り消し申請を出しましょう！！」
「どのような理由でかの？」
理由が無ければ卒業取り消し申請は通らん。
「そ、それは……。」
「彼の成績をみたじゃろ？
座学は2位、魔法薬、魔法具の成績はトップ、魔法以外の実技は高評価。
何か問題を起こしてからでなければ、此方は動けん。」
学長室にいる全員の表情が曇る。
バン！！
「が、学園長！！」
明石君が飛び込んできた。
「いまメルディアナに問い合わせてみたら、元ＭＭ軍に教師から体術の指導を受けていたことがわかりました！
更に、アリアドネーの魔法本屋から、エド君あてに大量の歴書、経

済学書、魔法構築術、さらに錬金術に関する書物が届いたとの記録もあるそうです！」
「な、なんじゃと！？」
メルディアナからの資料にそんなことは書いてなかったぞ？
「それから、もう一つ報告が……。」
「なんじゃ？悪いニュースかの？」
明らかに、明石君の表情が曇る。
「はい。アリアドネーからエド君に書物が届いた数日後に、エドワード・エルリックと名乗る人物から、魔法と錬金術を合わせた術のレポートが届き、一部研究者が発動に成功したとか…。」
いったいどういう繋がりが有るんじゃ？
時期的に確かに妙じゃが。
「分かった。明日の夜にエド君との顔合わせを行う。それまで、彼への魔法使いとしての接触を禁止する。」
食い下がる者も居たが、一先ずは収まった。
儂は一人になった部屋で、
「エド君、君はいったい何者なんじゃ？」
独り言とこれからの事を考え溜息を吐く。

Ｓｉｄｅ　学園長　ｏｕｔ

麻帆良学園女子寮・６４３号室

Ｓｉｄｅ　エド
あの後食事と、日用品の買い出しや布団の手配、携帯の調達、駅のロッカーに預けてあった荷物を持って二人の部屋に来た。
荷物と言っても着替えと辞書、愛用の筆記具程度だが。
勿論『エド』が持って居た様なトランク。
原作で知ってはいたが、予想以上に広い。

「ベッドは上が私で、下が木乃香。
布団が届くのは明日昼位だから、ひょっと寒いかもしれないけど、私と木乃香の夏布団で我慢して。」
「構わないが、いいのか？俺、男だぞ？」
「何日か、ならともかく、一晩位やった構わへんよ。」
「そう言うなら、有り難く借りるわ。ロフト空いてるか？流石にリビングだと、夜二人が起きたとき、気使うだろうから、空いてるなら貸して欲しいんだが。」
「荷物も何もないからかまへんよ？」
許可を得てからロフトに上がる、ロフトも広い。
トランクを端に置き、辞書や筆記具、今日買ってきた本などを並べる。
「エド。寮の間取りとか説明するから下りてきて。」
「了解。」
リビングで二人が寮の案内地図を広げていた。
二人の説明でテナント、洗濯室の場所、食堂、使うつもりは全くないが大浴場の位置を教えてもらった。
寮の説明が長くなり、夕食時も説明は続いた。
木乃香の料理は絶品だったと、言っておく。
「大体寮の内部は解った。それから授業の事なんだが、教科書何処位まで進んでんだ？できれば教えてくれ、明日それぞれの担当の先生に聞いてる時間なさそうだし。」
「分かったえ。」
「わ、私、明日早いから、もう寝るわ。」
時刻は現在２２時、早い人はもう寝ているだろう。
「うん。お休み。」
「お休み。」
そのあと木乃香から全教科がどれ位の進み具合か、あと簡単な質問に答えた後寝た。
就寝時刻は、２３時をちょっと過ぎたところだった。

Side エド out

第４話　古菲との手合せ、明日からの準備（後書き）

次回は予定していたエヴァ戦ではなく、授業風景を書きます。
今回予想以上に話が進まなかった。
アンケートも６日から、１１日に伸ばしたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0836ba/

魔法先生ネギま！～英雄の息子は錬金術師～

2012年1月5日01時30分発行